
混合次元～楼上からの景色～
もえな

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

混合次元く楼上からの景色く

【作者名】

もえな

【あらすじ】

ゲーム会社で働く父を持つ主人公（咲也）

新学期、学校から帰ってきた咲也は

父から新しい試作品のゲームを送られ

いつものようにPrayしようとしたのだが、PCに映っていたのは

「お、お 女の子!？」

DT高校生と電子少女と仲間達がおくる事件解決の物語！

参考資料

ドラゴンクエスト

ソードアート・オンライン

ほんの一部だけ参考にさせてもらっています。

似ている作品がありますが、完全オリジナルとさせて頂いています。
あまりにも似ている作品があるときは変更しますので、その作品名
を教えてくださいただけると有り難いです。

プロローグ

「咲也様っ！」

遠くで大型スクリーンの中の彼女が叫ぶ。

、、、そんな心配そうな顔するなって。

俺の身体は、どんどんビルの谷間に吸い込まれてゆく。

ああ、落ちていくってこんな感じなんだなあ、

俺は息を大きく吸い込んで、彼女に聞こえるように大きな声で叫んだ。

「最っっ高!!!」

1話 おくりもの

9月1日新学期初日

俺は、午前中に学校の授業が終わったので、学校から即座に帰宅した。

明日から授業が始まるのか、はあ、今時間止まればいいのに、まあ、そう願って止まる事なく秒針が動く音ははっきりと聞こえる。

平和だなあ、何もしたくねえー、

俺がソファに座りそんなことを考えていると

ピンポーン

と不意にインターホンがなった。何かな？

俺は立ち上がり一応印鑑を持って玄関を開けると、荷物が届いていた

「お届け物です」

と、配達のお兄さんが爽やかに言った。

まあ、そうだろうな。。。

俺は、「あっ、はい」と小声で返して印鑑を押し、荷物を受け取った。

はく、人見知りってつらい。

「ありがとうございます」

爽やかな配達員の人が出て、ゆっくり玄関を閉め一息つく。

俺はすぐ荷物を部屋に運ぶ。

箱を開けて中を見るとカプセ、ル？

違うかな？ まあ、それっぽいものが入っていた。

差出人は？ ああ、やっぱりお父さんだ。どうりで。

俺のお父さんは、ゲーム会社で働いているから発売前の試作品のゲームがよく送られてくる。

俺は毎回、発売する前にこれで売りだしていいのかを確認している。

PCゲームか。確認する身としても一応説明書見ておくか。

はあ、俺はまた一息ついて説明書を読みはじめた。

2話 接続

【説明書読んで30分後】

、、、よし、立ち上げ方わかった。　　て言うか、

「この説明書多すぎだろ!!!」

ざっと読むだけで30分かかったぞ!?

いやいや、落ち着けおれ。

ま、分かったなら良いか　立ち上げるのはすぐ出来るから問題ねえけど。

まずパソコン起動させよう。起動させている間このカプセルをコードで繋いで、、、

そして次の動きに移ろうとすると、

ーアプリケーションを作動しますー

とPCから聞こえてきた。

「うえ!?!何か間違えた!?!?てか、起動するの早くね!?!」

初めての事で焦っていると、急に画面が青くなって、女の子のキャラが映し出された。

、、、え、何でー

3話 はじめましてと人見知り、

その女の子は、髪の色が水色で長さはポニーテールをしている状態で肩より少し長いくらい、

服は、白のワンピースにエプロン、の進化系みたいな、近未来、と例えるべきかな？

というか、普通に可愛いんだけど／＼／＼ 俺がおどおどしていると

―名前を記入して下さい―

と、画面に表示された。

今までは、前にしていたゲームの押しキャラ名にしていたがこのゲームは違々とみた。

ストーリー内で呼ばれるなら本名がいいだろう。

俺が「咲也」と記入する。

すると、女の子が、

「咲也様はじめまして。私はチノと申します」

と、話しかけてきた。

おお、凄いなこのキャラと音声で会話できるのか。俺が感心していると、

「咲也様？」

と返事を求められた。

「あ、ああよろしく。」

……くそっ、俺って二次元にまで人見知りするのかよ／＼／

4話 時間

二次元にまで人見知りすると知り落ち込んでいた俺。

すると女の子が

「では、設定はここまでです。 お疲れ様でした」
と、笑顔で言ってきた。

はく、やっと終わったく お疲れ！

、、、、

「じゃねーよ!?!」

俺は大事なことに気づき、つい大声をだす。しかし女の子は、

「咲也様急に大声出してどうしましたか。 頭おかしくなりましたか？」

と言ってきた。 、、、、（イラァ）

「いやいや、これだけなのか？俺が読んだ説明書もっと色々準備あったような、 マジ読んだ時間返して!!!??」

あっ、ついイラッとして大声出してしまった。。。女の子固まってるし。。。

「――あ、これバクか、？ 完全バクってるなー、

俺が、色々いじっていると、また女の子が動き出した

そして、

「これで良いでしょうか？」

と俺に尋ねてきた。ん？何の事？

俺が困っていると、女の子が笑顔でPCの端の時間表示を指した。

11時35分。

「咲也様の要望にお応えして」

「時間を戻しました」

「っえー、

「いや、本気にすんなよ怖えよ！！」

てか、時間戻すのって、あんなあっさり出来るもんなのか???

もっとこう、ぐわっー とかなるものだと思ってた、

というか、数字変えてるだけなんじゃ、
そう思い、スマホなど
家中の時計を確認するが

「まじか、」

「どうかなさいましたか咲也様？」

「いやー、まじで時間を戻したんだなあ、w」

「はい、当たり前じゃないですか【ww】」

「ははっ、w オイちょっとバカにしただろお前」

「してませんよ。咲也様もう少し信用という言葉覚えましょう」

信頼か、

「俺には似合わねえよ、w」

「、、、そーですね」

いや、そこは否定しろよ！

と思ったが二次元だし、否定できる程でもないし、黙っておこう。

すると、女の子が、

「咲也様ちょっといいですか。」

と、笑顔で聞いてきた。何かまた嫌な予感がする、

うわぁ 返事したくねー、

しかし無視するのは心苦しくて

「えー、う、うん。」

と、嫌々返事した。すると女の子、空気を全く読めない奴だったらしく、こう言い放った。

一一 事件が発生しました 一一

∧ i 7 2 0 7 | 4 2 9 8 2 ∨

5話 事件現場

俺は今東区のビルに来ている。

事件が発生したからだ。自分で言っておいてあれだけど……

「頭おかしいんじゃない!？」

「いえ、咲也様がヒマなのが悪いんです」

うーわ、、、コイツ、、、最悪。

俺がドン引きしていると、女の子が

— 情報入手出来ました —

と報告してきた。

いつのまに!?!しかし、情報なんてどこから手に入るんだ?

「犯人は人質をとり、このビルの最上階に立てこもっています。仲間はずん30人程度。まあ、あれですね」

— チンピラ共が金欲しさに気をおかしくして発生させた事件ですね
w —

酷い言われようだ、しかし頭を使わなくて良さそうだな。複雑

で裏のある事件はゲームで体験済みだ。正直めんどくさい

「あとはまとめたので読んでください。三秒後に画面を切り替えます。」

「了解」

3・2・1、俺は返事をし変わるのを待つ。すると、【ぱっ】と画面が切り替わった。

その瞬間俺は猛スピードで読み始める。綺麗にまとめたある内容はこうだった

5・5話

- 犯人は人質をとり、立てこもり中
- 犯人の目的は多額の金
- 犯人は、団の下っ端。(お金無くて立てこもり)
- 屋上へ行くには階段しかない。その他はエレベーターがある
- 警備システム 危ないもの特に無し
- 近くのビルの屋上に小型ジェット機
- ビルは立入禁止
- 警察は説得のみ行っている
- 敵人数は分かっていない。
- 人質は、この事件のリーダー(ボス)と一緒にいるもよう
- ビルは十階建て

今の咲也の情報 【いるのかこれ】

- 時間 ビル→昼12時
- 昼ご飯×
- 持ち物→スマホのみ!(イヤホン無し)
- 洋服→制服^{ブレザー}
- 能力→ゲーマー?
- 運動神経→中の上 (ただ運動をしない!オタクだから!)

6話 人質

うあ、よくこの短時間でこれだけの情報集めたな、
読み終わって俺が感心していると、音声だけで

「人質の方がわかりました。すぐに写真を出します」

との報告があった。再びパッと画面が変わり、映しだされたたのは雑誌の表紙だった。

「うわあ、嘘だろく、」

「咲也様どうかなさいました？」

「どうしたも何も、この人近所のお兄、お姉、あー、お、オネエさん、」

まさか人質がオネエさんとは、本気か。

「何言ってるんですか咲也様 この人は男ですよ？」

何も知らない女の子が小馬鹿にしたように言うてくる。

まあ、普通はイケメンの男に見えるよな、イケメンの、

はぁ と俺は肩を落とした

すると、全く空気の読めない女の子が

「そうでした！咲也様 咲也様」

と俺を呼んできた。

「何だよ」 我ながら素っ気ない返事をする、全く気にする様子も無くこう言った。

「そろそろ名前で呼んでくれませんか？」

「、、、！? えっ／／／！?」

7話 名前

「咲也様一度も呼んでくれませんか？」

うっ、これを笑顔言われると余計怖い、

「呼んでくれないのでしてたらスマホの音声解除私の名前にしますよ」

「ちょっと！それは困るんだけど！！」

「ですよね。」

、、

えっ？何この間。

彼女は、さあ！ と顔で語りかけてくる。

うっ、困ったぞ！？ 今期最大のピンチだ、！

まって、まってまって、、！！

なんとか回避、出来ねえかな、、！？

あまりにも困惑していたので、女の子が

「咲也様、まさか、、、」

と、声をかけてきた。

「ちがう、ちがうちがう！忘れてたとかねえから！ちゃんと覚えてたからっっ！」

女の子の言葉をかき消すように大声を出したが、次の瞬間とてつもなく後悔した。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~20755

混合次元～楼上からの景色～

2017年12月04日 21時45分発行